

研修名 幼児教育・保育

平成29年9月13日（水） 13：30～16：00

講演 「幼児期の教育と小学校教育の接続」

講師 鳴門教育大学大学院 木下 光二 氏



## 1 講演要旨

### 1) 連携と接続

- ① 連携…保育所、幼稚園、こども園と小学校の先生同士の交流、子ども同士の交流など、一緒に活動をしたり、遊んだりすること  
子どもや先生の交流活動
- ② 接続…教育課程と保育課程をつなぐこと（人が変わっても、やらなくてはならないこと）
- ③ 接続、連携のステップ ゆっくり着実にやっていく
  - ・ステップ0…予定や計画がまだない
  - ・ステップ1…始めたいのだが、まだ検討中
  - ・ステップ2…年数回の交流、未カリキュラム
  - ・ステップ3…交流の充実、カリキュラムの完成
  - ・ステップ4…内容の省察、検討、改善

### 2) 改定の方向性…どの施設でも幼児期に必要とされる教育の提供 幼児期から 高校まで一貫性をもち、同じ力を育てる

- ① 幼児教育の資質・能力の3つの柱
  - ・知識・技能の基礎
  - ・思考力・判断力・表現力の基礎
  - ・学びに向かう力・人間性等
- ② 小学校以上の3つの柱
  - ・知識・技能
  - ・思考力・判断力・表現力等
  - ・学びに向かう力・人間性等

### 3) 遊びは学び（幼児期に最も重要なこと）

夢中になって、遊び込めているか、やりたい事を本当に没頭してやっているか

#### ① 学びの芽生え

- ・5歳児の文字 「綿毛を植えています」  
文字は書きたい、伝えたい気持ちから入る。
- ・5歳児の色水あそび ～A園とB園の違いから～  
A園 園庭の裏に生えているヨウシュヤマゴボウ、藍の葉で遊ぶ園児  
自ら材料を集めて、すりこ木を使って色水を作りだしている。また、おろし金を使い、石鹼で泡を作り、それぞれを合わせてケーキを作

る。子ども達で役割分担しながら遊びを展開し、協同的な遊びの中から、気づきや発見、喜びを共感している。能動的な遊びの形態  
B園 果物の皮を利用して色水あそびをする園児  
保育者が色水あそびの材料となる果物の皮等を準備し、設定保育として、クラス全員で色水あそびを楽しむ。園庭の環境には誰も働きかけていない。盛り上がっているが、受動的な遊びの形態

保育の質の違いが見られる。遊びの形で、自らの発見や気づき、達成感が変わってくる。遊びを自分たちで作っていく子は、学校で学びを作っていく。

## ② 学校探検 オリエンテーリング

- ・小1と年長児〈5歳児〉のペアで、学校探検
- ・幼児が何を学んでいるか
- ・保育者の意図

## 2 感想

乳幼児期から高校（大学）までを見据えて、一貫した方向性で同じ力を育てていくことが、指針改定の接続の主な部分であることがわかった。そのためには、土台となる保育所、幼稚園、認定こども園は、共通した教育が求められる。次へうまくバトンをつないでいくために、3つの柱を中心に相互作用しながら、保育が展開されていくことが重要な部分である。

平成22年の改定から小学校との接続はうたわれてきたが、我が園でも、まだまだ、十分な連携、接続とは言えない現状にある。園で育まれてきた力は、学校や学習につながっているのか、自園の取り組みはどうか、お互いに寄り添う機会や場がもっと必要だろう。今回の改定には、具体的に「幼児期の終わりまでにそだってほしい姿」として10項目が記載されてある。研修で観た幼児の色水遊びの場面では、子ども達の自主的な展開の方は、自らの学びが数多くうかがえた。一方、保育者が遊びを展開する園の方は、同じ題材でも学びの部分が少ない。保育の質の違いで、子どもの学びが大きく変わってくるのがわかった。幼児教育の現場において、どのような環境が最もふさわしいのか、今回の研修を通して見えてきた。

特別な保育をするのではなく、自発的な遊びから子どもはいろいろな事を自然に学んでいることがわかった。まさに「遊びは学び」である。保育者の役割はこのような場を保障する事ではないだろうか。保育者が手を掛けた分、学びの芽を摘んでしまっていることに気付いた。自園の幼児教育を見直し、学校との連携を図って、もっとお互いが行き来しながら、伝え合うことが必要である。子ども達が円滑に次へのステップに進めるよう、園と学校で連携と接続のあり方を見直していくことから、まず始めたい。

(記録 吉美こども園 志賀涼子)